

琉球大学学術リポジトリ

日本人非ネイティブ夫婦による就学前児のバイリンガルの言語発達におけるダイアリースタディ（1）
—ある日本人女児の0歳～4歳7ヵ月間のバイリンガルの言語習得における縦断的研究—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2023-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): simultaneous bilingual, one person; one language, iceberg model, BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) , CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) , natural order hypothesis, codeswitching, Total Physical Response (TPR) 作成者: 波平, 貢司, 下地, 敏洋, 東矢, 光代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020033

日本人非ネイティブ夫婦による就学前児の バイリンガルの言語発達におけるダイアリースタディ (1)

—ある日本人女兒の0歳～4歳7ヵ月間の
バイリンガルの言語習得における縦断的研究—

波平 貢司¹・下地 敏洋²・東矢 光代³

A Diary Study of Bilingual Development in Early Childhood
by a Non-Native Japanese Couple (1)
—A Longitudinal Study of Bilingual Language Acquisition in a Japanese Girl,
0 to 4 Years 7 Months—

Koji NAMIHIRA¹, Toshihiro SHIMOJI², Mitsuyo TOYA³

Abstract

Background and Objectives: This article was written to demonstrate the method and effectiveness of early childhood bilingual education in Japan by a non-native Japanese couple, and to clarify the process of language acquisition of the subject child by comparing and analyzing the characteristics of language development of bilingual children.

Research Design and Methods: One examinee is a daughter of a non-native Japanese couple (father speaks English), and we analyzed the process of bilingual language acquisition in her early childhood. Additionally, as a comparison of the development of language ability, we analyzed the language ability development of a daughter raised by a native English / native Japanese couple, and another daughter raised by a non-native Japanese couple of English beginners.

Results: (1) Even for non-native Japanese couples, if bilingual education is developed in accordance with “one parent; one language,” where one parent treats the child in English and the other parent in Japanese, the language acquisition process is nearly the same as that of Japanese-English bilingual children of native English / native Japanese couples. However, this does not apply to Japanese L2 learners with respect to the acquisition of plurals and articles.

(2) Compared to Japanese-English bilingual children of native English / native Japanese couples, the subject child’s language ability showed similar development. Both receptive and productive skills have developed as seen in Japanese-English bilinguals, and production through the application of intaken phrases has been confirmed.

Discussion and Implications: In this research, the bilingual language development from 0 to 4 years 7 months was discussed, so continued research after that age is needed to determine the final development of early childhood bilingual language development.

Keywords: simultaneous bilingual, one person; one language, iceberg model, BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills), CALP (Cognitive Academic Language Proficiency), natural order hypothesis, codeswitching, Total Physical Response (TPR)

¹ 沖縄県立球陽高等学校 教諭

² 琉球大学大学院教育学研究科 教授

³ 琉球大学国際地域創造学部 教授

I はじめに

国際化が進む中、日本では英語教育に関する議論は多くの場面でなされているが、バイリンガル教育に関する議論は少ないのが現状である。一方で、国際結婚の割合は年々上昇し、2018年には年間2万組を超え、英語圏、非英語圏にかかわらず多くの国際カップルが誕生し、子どもを授かっている¹⁾。この現状を鑑みると、バイリンガル教育の必要性はますます高まっていくことが予想されるが、移民の受け入れが少ない日本は、アメリカ、カナダ、オーストラリア等の国々と比較し、バイリンガル教育研究の実践事例が少なく、その方法論や実践、インターナショナルスクール等の学校が整備されていないのが現実である。

「バイリンガル」は、分類上その種類はいくつかに分けられる。習得の時期により分類すると、幼少の頃に自然に2つの言語を同時に習得した同時バイリンガル (simultaneous bilingual)、及び第1言語 (L1) 習得以降に第2言語 (L2) を学習して獲得した継起バイリンガル (sequential / successive bilingual) が挙げられる²⁾。また、その言語能力により分類すると、均衡バイリンガル (balanced bilingual) と呼ばれる2つの言語間に能力差がほとんどなく、各言語のモノリンガル母語話者の能力と近い能力を発揮するバイリンガルが挙げられる²⁾。均衡バイリンガルは、2つの言語間に能力の差はほとんどないものの、言語ごとに得意な分野が存在するのが普通である。一方、2つの言語能力に差があり、片方の言語のみがモノリンガル母語話者の能力と同等で、もう片方の言語能力はそれには劣るが、高い能力を保持しているバイリンガルは偏重バイリンガル (dominant bilingual) と呼ばれる²⁾。

これまで挙げたバイリンガルのタイプは、バイリンガル教育が成功したタイプのバイリンガルであるが、そうではないバイリンガルも存在する。それは、2言語ともモノリンガル母語話者の能力レベルに到達していない二重限定バイリンガル (double-limited bilingual) と呼ばれるものである²⁾。二重限定バイリンガル (double-limited bilingual) の場合、生活面や仕事面に大きく影響を及ぼすと考えられ、いずれの言語のコミュニティにおいても生活に不便が生じると懸念され

る。国際的に見れば、これまでこの二重限定バイリンガル (double-limited bilingual) に陥らないように、どうすればより良いバイリンガル教育が展開できるか実践してきた研究は多い²⁾。これまでの先行研究により、「正しいバイリンガル教育」の輪郭が少しずつ明らかになってきたが、冒頭で述べたように、日本においてはバイリンガル教育に対する議論が発展途上であり、日本における実践事例や研究から得られた知見は、国際的レベルでは十分でないと考える。特に、非ネイティブの日本人夫婦による日本におけるバイリンガル教育の研究は、時代の状況を踏まえると、その研究を深化させることが重要だと考える。

本研究の独創性は、ある非ネイティブの日本人夫婦による日本におけるバイリンガル教育の実践を踏まえ、先行研究で明らかにされてきたバイリンガル児の言語発達と比較しながら分析していくことにある。本質的に、非ネイティブの日本人夫婦間では日英バイリンガル児は育たないのだろうか。また、育ったとしても、その言語発達は英語ネイティブ・日本語ネイティブの夫婦間での日英バイリンガル児と異なるのだろうか。本研究の目的は、研究データが希少な就学前バイリンガル教育に焦点を当て、非ネイティブの日本人夫婦による日本におけるバイリンガル教育の方法とその効果を示すこと及び対象児の言語習得の過程について、先行研究で明らかにされてきたバイリンガル児の言語発達の特徴と比較・分析しながら明らかにすることである。

II 先行研究の概要

酒井・小柳 (1994) は、就学前の幼稚園児 (4歳クラス) の第2言語習得に焦点を当て、自発的な言語使用能力の獲得とインプット量の関係性について研究を行った³⁾。Krashenは、第2言語習得初期の過程において、学習者はある一定期間の沈黙期間 (silent period) を必要とすると述べており⁴⁾、酒井らが研究を行った対象児も例外ではない。酒井らはその沈黙期間 (silent period) がどれほど必要かを明らかにするため、同時に、必要とされるインプット量に関しても調査を行った。

対象児の調査方法として、約1ヵ月ごとにおよ

そ1時間の観察を計6回行い、教師と園児の活動を録画して分析を行った。分析の手順としては、2語以上の発話を自発的な言語使用の対象とし、communicative data(子どもがコミュニケーションのために自発的に発話したもの)とcontrolled data(教師によって導き出された発話)に分類して分析した。以下がその結果の要約である。

- (1) 初期の2ヵ月(5・6月)において、controlled dataが2語以上の発話の大部分を構成していた(5月:85.7%, 6月:63.9%)。3ヵ月後の9月には、communicative dataが50%以上を占めるようになり、7ヵ月後の12月には、2語以上の発話の総数79例のうち、communicative dataは93.7%に達した。
- (2) 否定表現について、Bloom(1991)は、統語的発達中、子どもが単純な文に加える最初の複雑性のひとつであると述べている³⁾。2語以上の発話のうち、I don't knowをはじめ、「否定語(No / No more / Don't) + 語句」あるいは「発話 + 否定語(No / No more)」という構造を持つ否定が、6ヵ月以降観察された。否定はcontrolled dataでは1例も確認されなかったことから、教師が意図的に教授したものではなく、自然習得の過程で獲得したものだと推察される。
- (3) 使用語彙の発達について、communicative dataで用いられた内容語(名詞、動詞、形容詞、副詞)の使用数が、6ヵ月後急激に増えた。また、一番使用数の多い機能語は、63語中20語を占めるandであった。この語によって長い発話ができるようになると推察される。
- (4) 幼稚園児の発話は、初期の5月から活発に生じていた。したがって、5月には沈黙期間(silent period)を終了していたと言える。一方、2語以上の発話の総数、否定の使用数、使用語彙数の増加を鑑みると、発話における質的变化及び量的飛躍は、9~11月の観察の時点で起こったと言える。つまり、自発的な言語使用には6ヵ月のインプット(input)を要したと考えられる。

酒井・小柳(1994)は、就学前の幼稚園児(4歳クラス)の第2言語習得には、約1ヵ月の沈黙

期間(silent period)を経て、自発的な言語使用には6ヵ月のインプット(input)が必要であるということを明らかにした。しかし、酒井・小柳自身、結論を一般化するには不十分な点もあると述べているように、就学前児の第2言語習得及びバイリンガルの発達においては、特に日本人のケースにおいてはまだ発展途上だと考える。よって、就学前児の第2言語習得及びバイリンガルの発達について、さらなる研究・調査が必要とされる。

本研究では、研究データが希少な就学前バイリンガル教育に焦点を当て、さらなるデータを収集する。非ネイティブの日本人夫婦による日本におけるバイリンガル教育の方法とその効果を示すとともに、対象児の言語習得の過程と、先行研究で明らかにされてきたバイリンガル児の言語発達の特徴について、比較・分析を行う。

III 研究仮説

非ネイティブの日本人夫婦による日本におけるバイリンガル教育の方法とその効果について、次のような仮説を立てた。

- (1) 非ネイティブの日本人の両親であっても、ひとりの親が子に英語で接し、もう一方の親が日本語で接する「1人1言語の法則」に則ってバイリンガル教育を展開することで、英語ネイティブ・日本語ネイティブの両親間での日英バイリンガルと同様の言語習得の過程があり、その習得順序にはKrashen等の先行研究が示す結果と同様の特徴がある。
- (2) 非ネイティブの日本人の両親であっても、ひとりの親が子に英語で接し、もう一方の親が日本語で接する「1人1言語の法則」に則ってバイリンガル教育を展開することで、英語ネイティブ・日本語ネイティブの両親間での日英バイリンガルと比較し、その能力レベルは同様の発達を示す。

IV 研究方法

1. 研究対象者

非ネイティブの日本人夫婦(父K:CEFR C1~B2程度 母Y:英語初級者)とその娘Sを対象とし、娘Sの生まれてから小学校就学前までの言

語習得の過程を分析した。また、言語能力レベルの発達の比較として、英語ネイティブ・日本語ネイティブの夫婦（父：アメリカ人、日本語はほとんど話せない 母：日本人、日常英会話はできるレベル）とその娘A、非ネイティブの日本人夫婦（ともに英語初級者）とその娘Bの能力レベルの発達を比較・分析した。ただし、本稿では、その内の0～4歳7ヵ月までを取り扱い、まとめることとする。

2. 研究方法と調査期間

上記の娘Sを対象とし、ダイアリースタディの形式で研究を行った。調査期間は0歳～6歳の6年間で、父Kは定期的に言語発達における変化を記録に取り、それを分析した。言語的成長段階を「沈黙期」「エコラリア期」「1語文期」「2語文期」「3語文期」「複文期」「ナラティブ期」「読み書き期」の8段階に分け、各成長過程において収めた動画の分析も加えることで、言語発達の特徴をより詳細に捉えるようにした。また、第三者として英語母語話者及び日本語母語話者による娘Sの言語調査も行い、客観的に娘Sの言語発達を評価できるようにした。なお、娘Sに対しては、父Kは常に英語で、母Yは常に日本語で話しかける「1人1言語の法則」を徹底したが、夫婦間の会話は日本語だった。

本稿では、上記の通り、その内の0～4歳7ヵ月までを取り扱い、「沈黙期」「エコラリア期」「1語文期」「2語文期」「3語文期」「複文期」についてまとめていく。

V 研究の結果と考察

先述の通り、娘Sの言語発達における記録を、「沈黙期」「エコラリア期」「1語文期」「2語文期」「3語文期」「複文期」「ナラティブ期」「読み書き期」の8段階に分け、分析した。娘Sを撮影した動画の分析も加え、それぞれの言語的成長段階において見られた変化をまとめていく。

1. 沈黙期（0～1歳6ヵ月頃）

言語学的にサイレント・ピリオド（silent period）と呼ばれるこの時期は、子どもが周囲の語りかけに意識を向け、言語習得に必要なイン

プット（input）を得る時期である⁴⁾。1950年代にChomskyは普遍文法（Universal Grammar：以下UG）という仮説を提唱したが、この概念により、世界のすべての言語はこの範囲内に収まり、幼児はこのUGを生得的に携えて生まれてくるため、あらゆる言語習得が可能になると考えられている⁴⁾。つまり、この時期はすべての言語音声に対応できる時期であり、言語習得に必要なインプット（input）を蓄積し、その過程において喃語のような意味のない言葉を発し始め、プライベート・スピーチ（private speech）と呼ばれる自分だけが理解する独り言につながっていく⁴⁾。娘Sは、1歳6ヵ月頃まで沈黙期と喃語の期間が続いた。この時期は、バイリンガルの言語発達の視点からは、受容スキルであるリスニング面の発達を除けば大きな変化はなく、父Kからの英語及び母Yからの日本語のインプット（input）を蓄積している状態だった。この期間のダイアリーとしての記録はないが、動画としての記録からそのことが推察される。

2. エコラリア期（1歳7ヵ月～2歳）

エコラリアとは、概ね1歳代に見られる音声模倣であり、言語獲得やコミュニケーションの発達において一定の役割を果たしていると考えられている⁵⁾。この時期、周囲の発話に対して、特に親の語りかけに対して、喃語とは異なる有意味語を模倣するようになり、沈黙期とは異なる言語発達が見られた。父Kは常に英語で語りかけたり本を読んだりする等、変わらず英語で娘Sと接し、可能な限り娘Sとの時間を持ったが、娘Sは母Yとの愛着の方が強かったと考えられる。それは、ダイアリー中の「どちらかと言うと日本語が強い？」という父Kの直感的印象からも推察される。また、この頃は日本語の保育園に通っていたため、その影響も大きかったと考える。母語の習得に関連する時間について、アメリカ人は6歳になるまでに17,520時間英語を聞いているというデータがある⁶⁾。このデータより、単純に言っても1年間で2,920時間、1日で8時間英語を聞いていることとなり、この頃の娘Sは、保育園の影響も重なり1日の大半を日本語で過ごしていたため、英語への接触量が1日8時間には及ばなかったと考えられる。

表1 エコラリア期(父Kの記録より)

1歳7ヵ月～	<ul style="list-style-type: none"> ・「Hello」に対しては「アロー」、「どうぞ」に対しては「どぞ」等、親の言葉をリポートしている。 ・最初に発した有意義なことばは、英語の「Hello」だった。 ・日常的な内容は、英語でも日本語でも理解している気がする。表情が明らかに違う。 ・英語と日本語の区別はない。両言語とも同じ「言語」として捉えている気がする。どちらかと言うと日本語が強い？ ・父は英語で、母は日本語で話しかける姿勢は守るようにしている。また、日英による本の読み聞かせも娘Sによく求められ、両親とも継続的に読み聞かせを行っている。父は英語の本、母は日本語の本というように「1人1言語の法則」を守っている。
--------	---

本の読み聞かせについて、これは言語習得において最も重要な事柄のひとつである。読む力の弱い大学生の共通点は、親が幼少期に本を読んでくれなかったこと、家に本がほとんどなかったことという研究結果もあるほど²⁾、長期的視点からも本の読み聞かせは重要である。読み聞かせにより、集中して聞くこと、考えること、想像すること、そして次にどのようなことが起こるか予測すること、すなわち論理読解の素地が形成される。読み聞かせを通して就学前に培われた「予測する力」「論理読解の力」は、小学校に上がったときの成績と関係があるとも実証されている²⁾。父K、母Yによる日英両言語での読み聞かせは、娘Sのバイリンガルの言語発達において今後重要な鍵を握ると考えられる。

3. 1語文期(2歳1ヵ月～2歳5ヵ月)

娘Sは生まれた当初から日英の言語環境で育ってきたため、時期により分類すると、幼少の頃に自然に2つの言語を同時に習得した同時バイリンガル(simultaneous bilingual)ということになる²⁾。同時バイリンガルの初期言語体系の特徴としては、3つの段階があるとされている⁷⁾。段

階1は、「2言語/1語彙目録」である。これは、1つの事象に対して1つの語しか持たないということであり、そのため2語文や3語文からなる発話の中に、両言語からの語が混在して使用される。段階2は、「2言語/2語彙目録/1統語規則」である。語彙目録が分化し、1つの事象についてそれに対応する語がそれぞれの言語で習得される。統語については未分化で、どちらの言語にも同一の規則が適用される。段階3は「2言語/2語彙目録/2統語規則」である。この段階になると、語彙、統語ともに分化し、それぞれの言語は特定の対話者と「1人1言語」形態で堅固に結び付けられ、真にバイリンガルとなる⁷⁾。父Kのダイアリーを見ると、娘Sはまさに1つの事象に対して1つの言語でのみそのものの名称を持っている。また、統語的にはおそらく日本語が優位だと推察される。ダイアリーの記録によると、英語の指示や質問に対して日本語1語で答えているとある。現時点では発話量が十分でないため、その規則の抽出は困難かもしれないが、日本語での回答が多いということは、この頃日本語の保育園に通っていたことも加味して考えると、日本語の統語を基盤としている可能性が高い。

表2 1語文期(父Kの記録より)

2歳1ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・“Hello.” “Thank you.” “Good night.” “どうぞ” “あーと(ありがとう)” “これー”等の1語文が出始める。周囲の子より遅かった。
2歳3ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・色の名称を覚え始めた。ぬり絵の影響か。 ・「さとうきび」のことを「sugarcane」と認識している。保育園までの送迎の途中にあるさとうきび畑を見るたび“Sugarcane! Sugarcane!”と喜んで連発。「さとうきび」という日本名は知らない。同様に、ウンボを見ると“digger!”と連発。日本名は知らない。

2歳4ヵ月 ～5ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・英語及び日本語での指示がかなり通るようになった。日常的な指示は明らかに理解している。しかし、その応答には日本語1語で答えることが多い。 ・足をひねって仕事を休んだ時、動きに制限がかかる父に対して、必要なものを英語の指示通り運んでくれたりいろいろお手伝いしてくれた。
---------------	--

同時バイリンガルの初期言語体系の特徴である「2言語／1語彙目録」は、Cumminsの「2言語共有説」によっても説明が成り立つ²⁾。2言語共有説とは、2つの言語は別個のチャンネルがあるが、根底では互いに密接につながっていて、相互に影響を及ぼすという説である²⁾。同時バイリンガルの初期言語体系において1つの事象に対して1つの語しか持たないというのは、両言語が互いに関係なく別々に独立して存在し、ことばは2つのタンクに別々に貯蔵されるという「2言語均衡説」では説明が成り立たず²⁾、反対に両言語のタンクがつながり、相互に密接な影響を持つという方がより説明がつく。

この同時バイリンガルの初期言語体系における「2言語／1語彙目録」を示唆する動画が記録に残っている。以下は撮影した動画より抜粋した娘Sと父K、母Yとの会話である。

- 父K：(黄色を指さして) What's this ?
 娘S：Yellow.
 父K：(正解を褒めるように) Yellow! Yay!
 娘S：(赤を指さして) Blue.
 父K：(不正解だと示すように) Hmm…
 母Y：(再度解答の機会を与えるため赤を指さして) これは？
 娘S：あお。
 父K：Nooooo.
 娘S：あか。これは？
 母Y：これは？
 娘S：White.
 母Y：うん、ホホワイトね。

このように、娘SはYellowとWhiteは英語でインテイク (intake) されているが、赤や青についてはまだ日本語でも英語でもインテイク (intake) されていない。むしろ、“Blue.”と解答して不正解だったにもかかわらず、“あお”と再度解答する点では、Blueと青が別物という認識だと推察される。つまり、Blueも青も、赤、Yellow、

Whiteも、すべてが異なる事物で異なる名称を持つという認識であり、Blue＝青のような1事物に2つのことばが存在するという認識はないと考えられる。ダイアリー中のsugarcaneの例も同様である。娘Sにとっては、「さとうきび」という単語はまだ自身の中に存在しておらず、1事象につきsugarcaneという1語しか登録されていない。

4. 2語文期 (2歳6ヵ月～2歳8ヵ月)

Krashenが提唱した自然習得順序仮説 (natural order hypothesis) とは、言語習得には自然な順序があり、言語の規則や構造の習得には一定の普遍的な順序が存在し、ほぼすべての学習者はその順序に沿う形で言語を習得していくという仮説である⁸⁾。Krashenによると、学習者は「進行形 (ing)・複数形 (s)・be 動詞」「助動詞・冠詞」「不規則動詞の過去形」「規則動詞の過去形・三人称単数現在形のs・所有格のs」という順序で言語を習得するとされている⁹⁾。娘Sについても、実際進行形 (ing) の習得から英語の習得が始まっている。これは、今日の前にあるものを描写する上で必要な言語規則・構造であり、具体的で子どもにとってわかりやすく、習得しやすい言語要素のため納得がいく。

また、日本語においては、「あ、アンパンマンだ!」のような間投詞＋名詞、「はい、どうぞ」のような間投詞＋会話的定型句といった初期2語文から、「アニー (Daddy) いた!」「ウータン寝てるね」のような主語・述語の関係が成立する、より文に近い形式の2語文へと発達している。日本語においても英語においても、やはり娘Sは通常の言語発達よりやや遅れてはいるが、同時バイリンガルの言語発達として捉えた場合、その「一時的な遅れ」は自然なことである。多くの言語学者が唱えている通り、バイリンガル教育における言語習得の遅れは一時的なものであり、順調に育てば言語面・コミュニケーション面だけでなく、

表3 2語文期(父Kの記録より)

2歳6ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的な英語での指示について何も不便を感じなくなった。日本語も同様。父や母が言ったことは明らかに理解し、反応する。好きなテレビやYouTubeを見ているときは、片手間で反応する。質問に対して日本語1語で答えることが多いが、英語1語でも答えるようになった。 ・“あ、アンパンマンだ!” “はい、どうぞ”等の初期2語文が見られた。 ・日本語よりも英語のYouTubeを好んで見ている。特に音楽に合わせて英語の指示通り動く(踊る)ことが大好きである。また、その英語の歌もよく歌っている。
2歳8ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・“Hello. How are you?” “Water, please.” “Eating doughnut?” “アニー(Daddy)いた!” “ウータン寝てるね” “さあ、食べて”等の動詞を使った2語文が見られるようになった。英語に関しては、日常的な挨拶や～ingの表現がほとんど。YouTubeで学んだ表現も多い。

認知面での優位性や思考の柔軟性、人種偏見を取り除き相手のニーズにより敏感に対応する等、その恩恵も多い²⁾。

幼少期に特に有効な英語の教授法として、全身反応教授法(Total Physical Response: 以下TPR)がある。TPRとは、Asherによって開発された言語教授法で、その基本的な考え方は、外国語の初期段階においてはリスニング技能の伸長を中心に据え、英語の指示に対して体で反応し、言語活動と全身動作の連合により目標言語の定着を図るものである¹⁰⁾。強制的に発話を促すことのないこの教授法は、子どもたちの心理的圧迫感を最小限に抑え、楽しくL2を習得できる。ダイアリーの記録にもあるように、娘Sも動画配信サイトを活用し、楽しく英語の歌に合わせてながら指示通り体を動かし、リスニング技能の伸長及び言語習得に必要なインプット(input)の蓄積が効果的に促進されたと考えられる。実際、この時期の英語による2語文は、英語の歌や動画から学んだものが多いとダイアリーにも記録がある。

ここまでの言語的成長段階を、Cumminsの2言語共有説のモデルで表すと図1のようになる。このモデルはBICS(Basic Interpersonal Communicative Skills)とCALP(Cognitive Academic Language Proficiency)と呼ばれる能力から構成され、冰山モデル(iceberg model)とも呼ばれる²⁾。この時点ではCALPすなわち認知学習言語能力・学力的思考はほぼ備わっておらず、L1(日本語)、L2(英語)ともにBICSすなわち基本的対人伝達言語能力のみが発達している

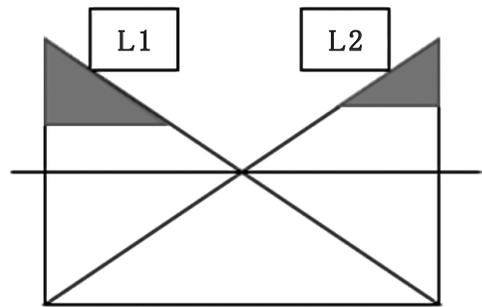


図1 2語文期までの冰山モデル

状態であり、日本語による発話の方が若干多いというダイアリーの記録から、L1の方が多少発達していると考えられる。しかし、「日常的な英語での指示について何も不便を感じなくなった。日本語も同様」というダイアリーの記録から考えると、リスニング技能・受容スキルにおいては、L1・L2ともに同程度に発達している状態である。

5. 3語文期(2歳9ヵ月～3歳4ヵ月)

父Kのダイアリーの記録によると、英語より先に日本語で3語文が観察されている。しかしながら、その4ヵ月後には、これまでインプット(input)された英語の定型句を応用した文が観察されていることから、4ヵ月後にはすでに、3語文以上の英語の発話も多いことがダイアリーの記録より推察される。3歳4ヵ月から通い始めた日英バイリンガルのプレスクールにおいても、入園当初から娘Sの英語力について先生方から褒められており、英語の発達も順調だと考えられる。特に、日本人として混乱する言語項目のひとつで

ある否定疑問文に対しては、日本語より英語の方がうまく答えられている様子がわかる。また、日本語と英語を混ぜた3語文、またはそれ以上の文が観察されたこともダイアリーに記録されていることから、先述のCumminsの二言語共有説からもわかる通り、2つの言語は別個のチャンネルがあるが、根底では互いに密接につながっていて、相互に影響を及ぼし合っている様子も考察できる。同時に、「コード切り替え」(codeswitching)と呼ばれる両言語の使い分けがまだ発達段階とも言え、語レベルでのコードの混用が見られる⁸⁾。コード切り替えには目的がある。この目的は年齢によって異なり、例えば、(1)強調のため、(2)ある語彙を当該言語で知らないため、(3)表現の簡潔さ・効率性のため、(4)集団のアイデンティティと地位を示すため、(5)誰かのことばを引用するため、(6)会話の話題から誰かを排除するため、(7)会話での緊張を和らげるため等がある⁸⁾。娘Sの場合、主に(7)の会話での緊張を和らげるため、すなわち2つの言語を混合使用の方が安心して会話できると推察する。

3語文期の言語的成長段階を、Cumminsの2言語共有説のモデルで表すと図2のようになる。この時点では2語文期までと同様、CALPすなわち認知学習言語能力・学力的思考はほぼ備わっておらず、L1(日本語)、L2(英語)ともにBICSすなわち基本的対人伝達言語能力のみが発達している状態であり、L2において習得した定型句の応用使用が広がり、L2の発達もL1に追いついたと考察する。

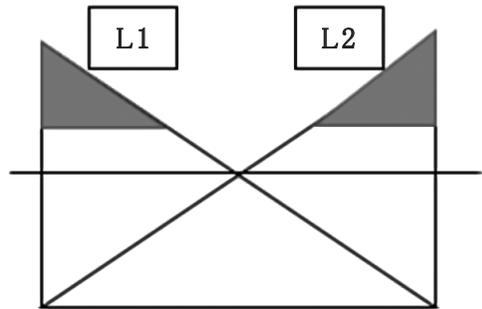


図2 3語文期時点の氷山モデル

表4 3語文期(父Kの記録より)

2歳9ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・英語より先に、日本語で3語文が出始める。“さあ、いただきますしょうか”のように、3語文の冒頭は、問投詞や人の名前、物の名前が多い。つまり、2語文に独立した問投詞、名詞等の表現をくっつけている。
3歳1ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・“じゃあ、うーん、to Uncle Shinji.”等の英語と日本語をミックスした3語文が見られた。英語に関しては、定型句として教えた表現のみ3語文、またはそれ以上を言うようになった。例) Can I have ○○, please?, Can you~, please?, I can~, Let's do ○○. また、“○○(娘Sの名前)、△△食べたい”等のしっかりした3語文が出るようになった。日英ともに発音はまだ不明瞭な点が多い。 ・Aren't you sleepy?等の英語特有の否定疑問文に、Yes/Noしっかり答えられる。ただし、日本語で否定疑問文の質問をした場合、英語の場合と少し混乱していることも見受けられる。
3歳4ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・日英バイリンガルのプレスクールに通い始めた。8時30分~15時30分まで日本語と英語の環境の中過ごす。日本人の先生は日本語で、外国人の先生は英語で活動を行っている。英語の歌はもともと好きだったが、余計好きになった気がする。学校では、同年齢の子と比較して英語ができるとよく褒められた。ついていけるか、なじめるか、英語が嫌いにならないか心配もあったが、安心した。

6. 複文期 (3歳5ヵ月～4歳7ヵ月)

先述の通り、Krashenが提唱した自然習得順序仮説 (natural order hypothesis) によると、言語習得には自然な順序があり、言語の規則や構造の習得には一定の普遍的な順序が存在し、ほぼすべての学習者はその順序に沿う形で言語を習得していくと考えられている⁸⁾。Krashenによると、学習者は「進行形 (ing)・複数形 (s)・be 動詞」「助動詞・冠詞」「不規則動詞の過去形」「規則動詞の過去形・三人称単数現在形のs・所有格のs」という順序で言語を習得するとされており⁹⁾、娘Sについても、実際進行形 (ing) の習得から英語の習得が始まった。ダイアリーの記録から、その後

はbe動詞や助動詞、不規則動詞の過去形というように現段階では習得が進み、複数形や冠詞については習得が飛ばされている。これは、母語転移(L1 transfer)の影響であり⁴⁾、L1である日本語の性質を考えると納得がいく。日本語には複数形及び冠詞の概念が英語のようには存在しないことでこのような結果につながると考えられ、Krashenの仮説は、L1が日本語の場合一部適応されない内容はあるものの、基本的には概ねその通り自然習得がなされていると考える。それは、本研究のように非ネイティブの日本人夫婦によるバイリンガル教育においても同様に確認できた。

表5 複文期 (父Kの記録より)

<p>3歳5ヵ月</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語の3語文は問題ない。“この前やったようにやって下さい”“おなか空いたから食べよっか”のような複文も発し始めた。英語に関しては簡単なコミュニケーションの面では困ることはなく、使える定型句も増えてきた。Can you buy ice cream, please? 等の依頼表現, I want to drink water. 等の願望表現等が使えるようになっただけでなく、使用する動詞も増えてきた。また、日英ともに発音がクリアになってきて、聞き取りやすくなってきた。 ・もともと好きではあったが、以前にも増してYouTubeで英語の歌を自ら選び、長時間聴いて歌うようになった。また、英語のアニメも好んで見るようになった。 ・人形を隠してそれを見つけ出すHide & Seek (かくれんぼ) を父とするのが遊びのひとつとなった。隠した人形を、互いに前置詞を用いた表現でヒントを与え、探し出すというゲーム。遊びの中で英語が身についていくのを肌で感じる。 ・ことばは、英語の中に日本語が混ざっていたり、日本語の中に英語が混ざっていたりとミックスの状態である。
<p>3歳8ヵ月</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・親戚のアメリカ人と臆することなくコミュニケーションが取れる。 ・学校の連絡帳に「十分な英語のインプット量を得て、ことばが溢れてきた」と書かれていた。その他の子と比べて著しい速さで英語が上達していて、先生方は驚いている様子。 ・これまで動詞はすべて～ingか原形だったのが、特定の不規則動詞 (ate, had, went等) を使うようになった。 ・アルファベットの歌を歌いアルファベットが言えるようになった。同時に学校で少しずつphonics (アブクド読み) を習っているよう。家でもよくphonicsの話をする。ひらがなも習っているようだ。
<p>3歳10ヵ月</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・gonnaの表現をよく使うようになった。ただし、be動詞が欠落したり、否定形はdon't gonnaとよく言う。その都度父が言い直して繰り返すことで、自然な形で正しいインプットを与え矯正している。
<p>3歳12ヵ月</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・英語力を評価され、学校の行事の英語劇にて重要な役をもらった。クラスメートよりも英語はよくできるよう。 ・日英バイリンガルの学校に通い始めたことで、父母以外にも、誰に英語を使って誰に日本語を使うのか使い分けがだいぶ上手になった。

<p>4歳1ヵ月</p>	<ul style="list-style-type: none"> 日本人の同年齢のいとこ達と遊ぶ様子を見てみると、日本語でのコミュニケーションや発音等、まったく問題ないように思われる。最初の有意義なことばが出てくるまでに周囲より時間がかかり多少心配したが、年齢相応の発達をしている。特別教えたわけではないが、YouTubeや学校で学んだようでひらがなも読める。 “じゃあI gonna bring メルちゃん. (be動詞は欠落)” “I need waterよ” “DVD (英語発音でディーヴィーディー)が見たい” “Water bottle(同じく英語発音で) 持っていく” 等、相変わらず日英をミックスして使用する。だが、あえて日本語読みで「ウォーターボトル」と発音することもあり、日本語と英語の音声的特徴には気づいている様子。
<p>4歳4ヵ月</p>	<ul style="list-style-type: none"> when節やif節, because節の使用がかなり増えた。日本語に遅れは取ったが、英語でも複文が使えるようになった。父の影響を強く感じる(父が癖でよく使うフレーズである)。when節について, on Sundayやnext Sundayと言えば済む表現を, when it's Sundayとよく使う。 学校で反対語や職業に関する語, 国旗(国名)をフラッシュカードで習っているようで, 語彙力に広がりを感じる。
<p>4歳7ヵ月</p>	<ul style="list-style-type: none"> 習得したかのように見えた特定の不規則動詞(ate, had, went等)だが, いつものまにか過去のことに原形を使用するように戻った。原形にalreadyやfinishedをつけて, “I already eat lunch.” や “I finished eat lunch” のような表現をする。ただし, 未来のことにはgonna (be動詞は欠落) やwillを使うことができる。 do(~する)を多用。“I gonna do cooking.(be動詞は欠落)” “I gonna do toys.(be動詞は欠落)” のように, 「便利なことば」感覚で使用しているのだろう。

この時期の英語使用については、学んだ定型句を応用する場面がよく見られた。依頼表現、願望表現、未来表現や前置詞を用いた定型句等、多くの慣用的表現を習得しているのがダイアリーの内容より理解できる。特に注目したい表現として、when節を取り上げる。父Kの記録によると、when節をインテイク(intake)してからは、例えばwhen it's Sundayのように、on Sundayやnext Sundayで表現が済むものまでwhen節を用いて表現している。これは、英語という言語に対する観察力・分析力が発達し、学んだ定型句を応用して使用していると考えられる。この点より、わずかながらCALPすなわち認知学習言語能力・学力的思考が育成されたとも推察され、生産的な言語使用や表現における調整力が発達し、産出される表現が複雑化してきたと考える。when節と同様に、過去の表現にalreadyやfinishedをつけて表現を工夫している点も同じく、CALPの発達が理由であると考察する。ただし、不規則動詞の過去形に関しては、3歳8ヵ月時に1度習得されたように思われたが、一見自然習得順序に逆行し

ているようなことが起こっており、不規則変化に対応できていない。しかしながら、これは同様のことが英語母語話者の言語習得においても起こることが、先行研究で明らかになっている⁴⁾。

このような学んだ定型句を応用して使用する場面は、複文期初期ですでに確認されている。撮影された動画の記録より、以下にその1例を抜粋して示す。

- 父K：(母Yへのビデオメッセージ中の一言として) Say something to Mommy.
- 娘S：Say something to Mommy.
(父Kのことばの意味は理解していると思われるが、にやにやして父のことばを繰り返す)
- 父K：え？ Say something to MOMMY.
- 娘Y：Say something to DADDY.
- 父K：To Daddy？
- 娘S：Yes.
- 父K：What do you wanna say to Daddy？
- 娘S：○○(娘Sの名前) gonna go to Miyako.
(be動詞は欠落)

父K：Ah, I see. Say it to Mommy.
 娘S：Let's say it to Daddy.
 父K：OK.
 娘S：(父Kをシャドーイングするような形で)
 One, two…
 ○○(娘Sの名前)is gonna go to Miyako.
 (be動詞を補いながら自然に修正)

最初の父Kのことばを繰り返す様子は、定着しつつあることばを繰り返しながら堅固にしていく中でよく観察される発達過程であると同時に、娘Sの中で、“Say something to人.”という定型句がインテイク (intake) されていることを示している。「人」にあたる部分をDaddyに置き換え、応用して活用できるということから、先述の通り、言語に対する観察力・分析力の発達が推察される。また、gonnaの表現については、ダイアリー中にもbe動詞がよく欠落すると記録されているが、そのエラーを会話の中で修正し、自然に繰り返す様子が動画から見受けられる。このように、使用できる定型句を増やしながらか、それを応用して活用していく過程は、ネイティブの言語習得においても重要な過程である。

Kasper & Rose (2002) は、英語の要求表現について発達の5段階を示した⁹⁾。それは、(1)最初期：文脈依存性が強く、文法がなく、人間関係上の目標がない、(2)定型表現：丸暗記の定型と命令形に依存する、(3)分析開始：定型表現が生産的な言語使用に組み込まれ、会話に間接的表現が見られるようになる、(4)語用論的能力の拡張：レパートリーに新しい形式が加わり、「和らげ表現」が増え、文法が複雑化する、(5)微調整：会話者、目標、コンテキストに合わせて、要求の強さの度合いを微調整するという段階に分かれ⁹⁾、特に複文期後期において、娘Sは、語用論的能力の拡張がなされたと考える。それを可能にしたのも、when節やif節、because節等の複文の使用が安定してきたことによる。例えば、“Let's go to a park.”という表現は、この複文期には、“When it's Sunday, let's go to a park, because I gonna be happy.”のように、同じ要求でも「和らげ表現」を用いて、語用・統語ともに複雑化していること

がうかがえる。これは、Kasper & Rose (2002) が示す通り、自然な英語母語話者の言語発達と同様の発達が見られたと言える。

複文期の言語的成長段階を、Cumminsの2言語共有説のモデルで表すと図3のようになる。この時点では、ひらがなやアルファベットの文字が読めるようになったこともあり、CALPすなわち認知学習言語能力・学力的思考がわずかながら育成されたと考察するが、認知レベルに大きく影響が出るほどではない。また、英語について、習得した定型句の応用使用が定着している様子から、言語に対する観察力・分析力も発達したと考えられるが、同様にCALPに大きく影響が出るほどではないと考える。

3語文期以前は日本語の保育園に通っていたのが日英バイリンガルのプレスクールに取って代わり、L2(英語)のインプット(input)が増加し、L2のBICSすなわち基本的対人伝達言語能力の伸長も促進されたと考える。BICSについては、L1・L2ともに能力の伸長が見られた。L1においては、ダイアリー中の同年齢のいとこ達と遊んでいる様子からもわかる通り、BICSにおける問題は無いと考えられ、L2においては、プレスクールの先生方が他の子と比較してその発達の速さに驚いている様子から、生まれてから蓄積してきた膨大なインプット(input)が、BICSの発達に大きく貢献していると考えられる。

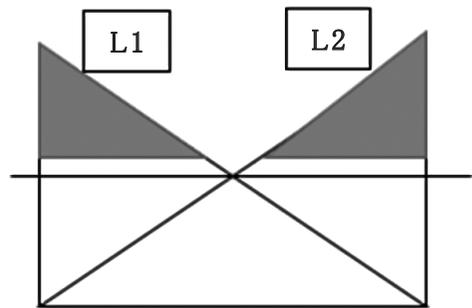


図3 複文期時点の冰山モデル

VI まとめと今後の課題

本研究の目的は、研究データが希少な就学前バイリンガル教育に焦点を当て、非ネイティブの日本人夫婦による日本におけるバイリンガル教育の方法とその効果を示すこと及び対象児の言語習得の過程について、先行研究で明らかにされてきたバイリンガル児の言語発達の特徴と比較・分析しながら明らかにすることであった。ただし、本稿においては、その内の0～4歳7ヵ月までを取り扱い、「沈黙期」「エコラリア期」「1語文期」「2語文期」「3語文期」「複文期」についてまとめた。本稿冒頭の2つの仮説に対して、4歳7ヵ月時点での結論は以下2点になる。

- (1) 非ネイティブの日本人の両親であっても、ひとりの親が子に英語で接し、もう一方の親が日本語で接する「1人1言語の法則」に則ってバイリンガル教育を展開することで、英語ネイティブ・日本語ネイティブの両親間での日英バイリンガルと同様の言語習得の過程があり、その習得順序にはKrashen等の先行研究が示す結果と概ね同様の特徴があった。ただし、複数形や冠詞の習得順序については、日本人のL2学習者については該当しない。
 - (2) 非ネイティブの日本人の両親であっても、ひとりの親が子に英語で接し、もう一方の親が日本語で接する「1人1言語の法則」に則ってバイリンガル教育を展開することで、英語ネイティブ・日本語ネイティブの両親間での日英バイリンガルと比較し、その能力レベルは同様の発達を示した。現段階では受容能力、産出能力ともに先人の先行研究通りに発達し、定型句を応用使用した産出が確認されている。ただし、最終的な就学前の言語能力レベルの発達については、継続研究を要する。
- このように、日本人非ネイティブ夫婦であっても、「1人1言語の法則」に則ってバイリンガル教育を展開することが、同時バイリンガルを育成する上で重要な要因であること、また、その言語習得の過程や特徴について、英語ネイティブ・日本語ネイティブの両親間での日英バイリンガル児と同様の発達を見せることが明らかになった。一方、本研究においては、父Kと母Yの言語的関わり他に、動画配信サイトや、月齢が後半になる

と日英バイリンガルのプレスクールに通った影響も否めない。しかしながら、これらの要素を加味しても、プレスクールでの他の子と比較した娘Sの言語発達を鑑みると、それ以前の1人1言語による日英のインプットが重要であったことは間違いなく言えることであり、動画配信サイト等の活用は、その手助けとなる有効手段のひとつとして捉えることが適切である。同時に、親の語学力に自信がない場合は、このような動画配信サイトを活用し、英語を聞き取る耳を育て、インプット(input)を与え続けることも重要だと考えられる。

文献

- 1) 令和3年度沖縄県の男女共同参画の状況について（最終ダウンロード日3月27日）
<https://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/heiwanadanjo/danjo/documents/r3okinawakennogenjyo.pdf>
- 2) 中島和子, 2007, 『バイリンガル教育の方法 12歳までに親と教師ができること』, p.1-16, p.17-32, p.33-48, p.191-209, アルク.
- 3) 酒井英樹, 小柳昭喜, 1994, 『幼稚園児の第二言語習得：自発的な言語使用能力の獲得とインプット量との関係に関する研究』, 中部地区英語教育学会紀要 第24号.
- 4) Rod Ellis, 1997, 『Second Language Acquisition』, p.15-30, Oxford University Press.
- 5) 萱村俊哉, 2012, 『自閉症エコラリアと健常児の音声模倣における自動性と意図－ジャクソニズムの立場からの考察－』, 武庫川女子大紀要 第60号.
- 6) 竹蓋幸生, 竹蓋順子, 2001, 『新しい英語教育 三ラウンド・システム』, 文京女子大学外国語学部・文京女子短期大学紀要 創刊号.
- 7) 山本雅代, 1996, 『バイリンガルはどのようにして言語を習得するのか』, p.77-99, 明石書店.
- 8) Colin Baker (岡秀夫 訳), 2006, 『バイリンガル教育と第二言語習得』, p.11-28, p.87-101, p.117-130, p.161-176, 大修館書店.
- 9) Patsy M. Lightbown, Nina Spada (白井恭弘,

岡田雅子 訳), 2020, 『言語はどのように学ばれるか 外国語学習・教育に生かす第二言語習得論』, p.5-38, p.39-79, 岩波書店.

- 10) アレン玉井光江, 上野めぐみ, 2000, 『幼児英語教育について』, 文京女子大学研究紀要 第2巻第1号.
- 11) ブレイディ 綸, 2021, 『日本語と英語の同時バイリンガルと読み書き～言語喪失を遅らせる～』, 琉球大学国際地域創造学部卒業論文